

# 近世前期における明末「随筆」の受容

## ―『徒然草』受容の側面―

伊藤 善隆<sup>a</sup>

<sup>a</sup> 湘北短期大学総合ビジネス学科

### 【キーワード】

漢文学 近世前期 野間三竹 人見竹洞 林鶯峰 林読耕斎 陳繼儒  
宝顔堂秘笈 遵生八牋 四時幽賞 本朝遼史 徒然草

### はじめに

「随筆」といえば、現代でこそ親しみのあるジャンルであるが、かならずしも古くからそうであったわけではない。中国の「随筆」の影響が本格的に日本に及ぶのは、近世前期から中期にかけてのことだと指摘されている<sup>1)</sup>。

そうだとするならば、日本における「随筆」の浸透を考えたときに、本稿で問題にする二つの事例は興味深い問題を含んでいるように思う。ひとつは、人見竹洞が、『群書考』の序文で、野間三竹の一連の著作を評して「随筆」と呼び、同時にそれらが日本の「随筆」の権輿となるのではないかと述べていること。もうひとつは、林読耕斎が『本朝遼史』で兼好を取り上げ、『徒然草』は「随筆」であると述べていることである<sup>2)</sup>。

そこで、本稿では、この二つの事例の背景を探りながら、野間三

竹、人見竹洞、林読耕斎ら近世前期の漢文学者の「随筆」に対する意識を検討してみたい。

### 一 野間三竹の「随筆」

「随筆」に対する漢文学者たちの意識を考える上で注目すべき人物に、野間三竹(元和元年(一六一五)～延宝四年(一六七六)、六十二歳)がいる。三竹は、父の野間玄琢につき医学を修め、やがて禁裏に伺候し、隔年に江戸にも出仕した。正保三年(一六四六)に家督を相続し、寛文八年(一六六八)には法印に進んでいる。名は成大、字は子苞、静軒・柳谷・潜楼・北山人とも号した。

三竹は、医者としての活動の傍ら、羅山以下の林家の面々と親交を結んだ。自身の著作には、鶯峰や梅洞ら、林家の面々に序を請うてもいる。「柳谷墓誌」の記述などによれば、約四十編もの著作があったというが、現在ではその多くが伝存不明となってしまう<sup>3)</sup>。しかし、それでも寛永年間の『沈静録』をはじめ、明暦・万治年間の『席上談』『望海録』『古今逸士伝』さらには寛文年間の『修養編』『北溪台毫』『群書考』など、その活動の大概を知ることのできる資料が残されている。

ところで、三竹の著作は、そのほとんどが、自らが読書した際の抄出を一書としてまとめたもの、言わば「読書ノート」をそのまま刊行した体のものであった。そうした三竹の著作は、たしかに近代以降のエッセーとしての「随筆」のイメージとは異なる。しかし、こうした抜き書きをまとめた三竹の著作も、当時においては「随筆」として受け止められていた。

つぎに示すのは、林家の門人で幕府の儒員であった人見竹洞が三竹の『群書考』(寛文三年序、田原仁兵衛刊)に寄せた序文である<sup>4)</sup>。

竹洞も、『本朝遯史』に跋文を寄せるなど、読耕齋や三竹と親交を結んでいた人物である。

昔し杜元凱、左伝の癖有り。是に於て、経伝集解起れり。王武子、馬の癖有り。是に於て、錦障金埒尽くせり。浣花居士、佳句の癖有り。是に於て、人を驚かすの語夥し。聞桂道人、香の癖有り。是に於て、几を繞り雲香しく、帷を下して春閑かなり。其の好む所のもの深きときは、則ち遂に之が癖を成す。然れども、書を嗜む者、古振ふるまり之を称して書淫と謂ふ者有り、書痴と謂ふ者有り、蠹魚と伍を為す者有り、吾之を書癖と謂はん。静軒野子苞氏、特に斯の癖有ること久し。子苞東武西洛に往来して、身は医官に在りて、心は山水に在り、手は翰墨に在り、目は古典に在り。西洛に帰るときは、則ち北山の鷹峰に居り、書楼を白雲溪に起こし、四部万卷、西陽之地を千里に縮め、岩を耕し谷に汲み、吟風弄月の余、其の楼に登る毎に黄卷圍繞の中に坐す耳。行旅に在るときは、則ち囊中侘物有ること無し。唯、数十軸の牙籤を貯ふ。馭邸に、輿馬に、之を繙とかざる無し。東武に来るときは、則ち赤坂の下、望海亭を構へ、登府の暇、家業の外、亦黄卷圍繞の中に坐す耳。未見の書有ると聞けば、嘗て之を借らずといふ無く、之を贍さずといふなし。其の簡編を攤ひらくときは、則ち飢て食を忘れ、渴して飲むを忘るるに至る。豈に好む所の深きものに非ずや。乃ち、心に得るもの有るときは、則ち之を冊に記し、年を積み月を累ぬ。既已に堆を成し、寛永に沈静録有り、慶安に備忘編有り、承応に竹窓漫筆有り、明暦に席上談、望海録有り、万治に呼燈録有り、寛文に北溪含毫有り。林学士兄弟父子の人に請いて、之が序を作る。頃日、記す所有り。積みて冊と為るもの、名づけて之を群書考と曰ふ。而して序を余に告ぐ。余、偶言たまひて曰く、吾、中華の書を見るに、

此の類、頗る多し。筆談、筆記、隨筆、佔筆、の如き是也。本朝の旧籍に於いて未だ斯の若きの書を見ざる也。後人之を見れば、則ち或は此に権輿すと云ふ者有らんか否や。謂つ可し奇なりと。誠に是れ、子苞博物好古しむの爲也。先聖の所謂述て作らず、信じて古を好む。今、此の事を録するもの、其作らざる、亦以て嘉尚す可し。想ふに夫れ言行の本を務るものは書也。本を務る者は道に入るの門、徳を積むの基。則ち其の書を嗜むの深きに於いてや、徳を好むこと、色を好むが如き者に庶幾か。因て斯の言を叙して、以て其の需に依て云ふ。

寛文癸卯春王正月葛東中郷金節父叙

途中、三竹の著作を中国の「筆談、筆記、隨筆、佔筆」に準えて、同様の書物は中国には多いが、日本では一連の三竹の著述がその権輿となるのではないか、と述べた箇所がある。すなわち、「吾、中華の書を見るに、此の類、頗る多し。筆談、筆記、隨筆、佔筆、の如き是也。本朝の旧籍に於いて未だ斯の若きの書を見ざる也。後人之を見れば、則ち或は此に権輿すと云ふ者有らんか否や。謂つ可し奇なり」という箇所である。

ここで注目したいのは、竹洞が「隨筆」と言い切らずに、「筆談、筆記、隨筆、佔筆」と言葉を並べ、「此の類」という言葉遣いをしていることだ。

これは、当時は現在のように「隨筆」という用語がまだ定着しておらず、おそらくは漠然とした用語、概念であったことをうかがわせる言葉遣いである。つまり、当時、中国の隨筆筆記の存在があつて、はじめて「隨筆」というジャンル・概念を意識するようになったと考えることができるだろう。

もう一点注意したいのは、竹洞が三竹を「書癖」の人であると記していることである。また、「身は医官に在りて、心は山水に在り、

手は翰墨に在り、目は古典に在り」ともある。これは、官事の傍ら自然を慕い書物を愛する三竹への賛美だが、同様の文言は『群書考』以外の三竹の編著の序文でもしばしば繰り返されている。いくつか例をあげてみよう。

天下の至楽は読書に若くは無し。北山野子苞氏、能く此の楽を知る。  
(人見竹洞「古今考序」)

吾自り之を觀なば、則ち山林の花、經史の中に在り。佳山勝水、亦も書中に在り。子苞、此の間に逍遙し、古人と談じ、古人と咲らひ、古人と吟じ、古人と遊び、世の務めを忘れ、家の貧を忘れ、身の勞を忘れ、老の至るを忘る。(林梅洞「讀書得閑編序」)  
嚮に、子苞鴻術の暇、洛の北山の幽溪に居り、眼を松澗の水に洗ひ、書を竹林の風に繙く。朝と無く暮と無く書中の友と相親む。  
(林梅洞「北溪含毫序」)

さらに補足すれば、『北溪含毫』の梅洞の序文には「随筆」を述作する意義についてふれたつぎのような一節がある。

夫れ書は読まずんばある可からず。読まざるときは則ち万物に瞽ん。既に之を読めば、則ち記さずんばある可からず。記さざるときは、則ち読まざると同じ。其の之を記すこと如何。思を覃に在る而已。然りと雖も汗牛充棟万卷の多き、豈に一一思を覃せん乎哉。故に、見るに随ひ聞くに随ひ、一と雖も之を記す。而して、歳移り日替り、或は之を忘る、者の比比有り。然らば則ち、之を為すこと如何。之を書に筆して、以て遺忘に備て可也。是れ古人視聽の録、随筆の考、由て作る所以也。野子苞の北溪含毫の編、蓋し是れ此の意也。(林梅洞「北溪含毫序」)

ここでは、「視聽の録、随筆の考」という言い方がされているが、要するに随筆は読書行為の結果として生じるべきものであるといふ、当時における「随筆」に対する認識の一端をうかがい知ること

ができる。

以上で繰り返して賛美されるのは、自然の中に身を置き、書物を愛する人物としての三竹のイメージである。そして、その生活の所産として、中国の「随筆」に準えられる著作があると述べている点に注目しておきたい。

## 二 明末の「随筆」と陳繼儒

ところで、竹洞が三竹の著作を中国の「随筆」に準えたとき、その念頭にあったのはどのような作品だったのだろうか。

中国の「随筆」<sup>5)</sup>には、宋代以降の儒者や文人が残したものが多数ある。しかし、とくに盛んだったのは明末清初の時代であった。筆記・漫録・談叢・清言・語録・日録・小品・題跋・尺牘・紀聞・雜録などという名前を付された「随筆」の類が夥しく執筆・出版されている。これらは、おもに「山人派」と呼ばれる文人たちの手になると、<sup>6)</sup>「小品」、あるいは「小品文」などとも呼ばれている。

その書き手であった明末清初の「山人派」と呼ばれる文人たちが、それまでの中国の典型的な文人たちと大きく異なる点は、知識人でありながら、かならずしも科挙を目的としなかったことにある。これは、明末の経済的發展により、科挙による仕官を諦めたとしても、折から盛んになった出版事業に関わることで、収入と名声を得る可能性が出てきたことによる。<sup>7)</sup>科挙を目的としなかった彼らは、必然的に隠逸のポーズを取るようになるため、明末の出版物には、山居隠逸に関するものが多い。「山人派」と呼ばれる理由も、隠逸を標榜して「山人」を号としたからである。<sup>8)</sup>

「山人派」が活躍したのは、万曆(一五七三～一六二〇)から泰昌(一六二〇)、天啓(一六二一～一六二七)、崇禎(一六二八～

一六四四)の頃とされる。しかも、明代以前の「隨筆」であっても、この時期に刊行されたものが日本に舶載されて流布したと考えられる例が少なくない。たとえば、考證隨筆中の初期のものとして有名な宋代の『容齋隨筆』も、和刻本の底本とされたのは、明の崇禎刊本であったし、また、その『容齋隨筆』とならんで宋代考証隨筆の双壁とされる『困学紀聞』の和刻本(寛文元年刊)の底本も明の万曆刊本であった。さらに、『鶴林玉露』(慶安元年刊)の底本も明の万曆刊本である。このように、宋代の作品であっても、日本で流布した本文は、明版に拠ったものが多い。

その明末の「山人派」の代表的存在で、「隨筆」の第一人者とされるのが、陳繼儒である。

陳繼儒(一五五八〜一六三九)は、松江華亭の人、字は仲醇、号は眉公。陳繼儒も二十九歳で科挙を諦めたというが、出版事業に関わり、多くの書物を刊行した。古い作品を校訂するなどして刊行したのもあるが、先行の書物からの引用を再編集した体の著作が多く、『太平清話』・『筆記』・『見聞録』・『読書鏡』・『珍珠船』・『辟寒部』・『銷夏言』・『岩棲幽事』などが知られている。とすれば、三竹が読書の摘録を自身の著作として刊行したのは、こうした編集方法を真似したものであろう。

その陳繼儒の一大事業となったのが、『宝顔堂秘笈』の刊行である。これは、万曆三十四年(一六〇六)の「訂正秘笈」・「眉公雜著」から泰昌元年(一六二〇)の「普集」まで、陳繼儒が十四年にわたって出版した一大叢書であった<sup>11)</sup>。

日本の慶長十一年から元和六年にあたるこの叢書の刊行は、当時最新のものとして注目され、たとえば鷲峰と読耕斎が石川丈山のために記した「詩仙堂六物前後三謡」(読耕斎)、「詩仙堂六物演前後三謡」(鷲峰)にも言及が見られる<sup>12)</sup>。それによれば、『考槃余事』な

どの山居隱逸に関する書物を、彼らは『宝顔堂秘笈』で読んでいたことがわかる。つまり、当時の儒者・漢文学者たちにとって、明末の出版物は、山居隱逸に関する重要な情報源となっていたのである。

### 三 三竹の編著書

では、野間三竹の著書を参考に、当時どのような明末清初の隨筆が日本に舶載されてきていたのか、具体的に確認してみよう。繰り返し指摘したように、三竹の著作はその読書の摘録を編集した体のものであるから、そこに引用されている記事の典拠を確認すれば、三竹が読んでいた漢籍がある程度明らかにすることができる。

先に序文を引用した、『群書考』の場合、少なくとも五十二種の書物からの引用がみられる<sup>13)</sup>。その中には、明代のものが二十四種、清代のものが一種、それぞれ確認できる。明代のものは、『意見』(陳千陞)や、『読書筆記』(祝允明)、あるいは『春風堂隨筆』(陸深)や『聴松堂語鏡』(閔度)、『菽園雜記』(陸蒼)など、その大半が「隨筆」の範疇に入るものと考えてよい。

また、陳繼儒の著作に注目すると、『群書考』では『辟寒部』・『鎮夏部』の二書を使用していることが確認できる。ちなみに、三竹の著作でもっとも陳繼儒の著作を利用したものは『席上談』で、『安得長者言』・『岩棲幽事』・『見聞録』・『書蕉』・『珍珠船』・『読書鏡』・『筆記』・『枕譚』・『太平清話』の九種類の著作を利用している。なお、目下確認し得る三竹の編著を調査した限りにおいて、作者(編者)別に見た場合は、陳繼儒の著作がもっとも多く使用されている。さらに、『宝顔堂秘笈』に収録された書物に注目すると、『群書考』で使用されたものうち、二十種が『宝顔堂秘笈』に収録されることが確認できる。その他の編著も含めれば、三竹が使用した書

物で『宝顔堂秘笈』に収録されているものは、宋代のものでは、『世範』（袁采）・『脚氣集』（車若水）・『桂苑叢談』（馮翊）・『王氏談録』（王欽臣）・『林下偶譚』（呉子良）・『談苑』（孔平仲）・『貴耳集』（張端義）があり、明代のものでは、『讀書筆記』（祝允明）・『長松茹退』（真可）・『譚言長語』（曹安）・『農田餘話』（長谷真逸）・『意見』（陳干陸）・『蠲笑偶言』（鄭瑗）・『井觀瑣言』（鄭瑗）・『婆羅館清言』（屠隆）・『田居乙記』（方大鎮）・『丹鉛總錄』（楊慎）・『西堂日記』（楊豫孫）・『長水日抄』（陸樹声）・『病榻寤言』（陸樹声）・『燕間錄』（陸深）・『玉堂漫筆』（陸深）・『春風堂隨筆』（陸深）・『賢奕編』（劉元卿）・『木几冗談』（彭汝讓）・『東谷贅言』（敖英）・『先進遺風』（耿定向）・『一庵雜問錄』（唐枢）・『見聞錄』（陳繼儒）・『讀書鏡』（陳繼儒）・『太平清話』（陳繼儒）・『珍珠船』（陳繼儒）・『筆記』（陳繼儒）・『岩棲幽事』（陳繼儒）・『安得長者言』（陳繼儒）・『書蕉』（陳繼儒）・『枕譚』（陳繼儒）などがある。

つまり、当時すでに多くの明末の随筆が舶載されており、それだけ明末の出版事業の隆盛や陳繼儒を始めとする明末山人派の文芸の影響が大きかったことが想像されよう。

#### 四 室鳩巢の批判

ところで、以上のような明末の「山人派」の影響について。竹洞や三竹より一代後に活躍した室鳩巢（万治元年（一六五八）〜享保十九年（一七三四））は、つぎのように批判的に記している。

万曆崇禎の間に及び、四海氛祲、盜賊公行す。是に於て、儒者退きて田宅を買ひ圖書を蓄て以て生を樂しむの計と為す。日に以て逸居して暇多ければ、則ち専ら書を著し言を纂すを以て事と為す。王鳳洲陳眉公の徒の若きは其の尤也。率ね浮靡無実の

言を以て新奇悦ぶ可きの説を駕し、以て世に衒ひ俗を駭かし名を釣り譽を要めて、以て不朽の業を謀らんと欲す。其の最も輕薄なる者は、又己が名を以て古人の書に託さんと欲すれば、則ち妄に自ら改作して更に新製と為し、夫の先賢の遺書をして復た其の全編を見ること無から使む。勝嘆す可き哉。是に於て、簡帙漫漶、紛紜委積、以て清に至りて其の弊未だ息まざる也。近年商舶載せて本邦に至る者、其の幾数といふことを知らずして、世儒好みて之を読み、乃ち駁雜の説を強記し、多く猥瑣の事を識る。是に由りて博聞の名を得、世の為に尚ばる。羅山林氏自り首として、此を以て家に名づけて、世の学者、翕然として郷慕し、通に相ひ師祖として、復た理義の学、聖賢の事業有るを知らず。故に書愈多くして文愈弊れ、学愈盛んにして道愈衰ふ。此吾儒の蠹賊。其の害、異端に十倍す。

〔前篇鳩巢先生文集〕八「答遊佐次郎左衛門第二書」  
鳩巢は文中で陳眉公（陳繼儒）の名前を挙げて批判しているが、こうした意識は、やはり明末清初よりも一つ後の世代になる『四庫全書』の編者たちの意識と共通する。すなわち、『四庫全書』の「総目」には、山人派とその著作に対して、容赦ない批判の言葉が並ぶ。たとえば、陳繼儒の著作は、

此書、雜事碎語を取り、鈔録して帙を成すも、略倫次無し。

〔『筆記』〕

詞意佻纖、明季山人の習を出す。

〔『巖棲幽事』〕

議論殊に淺陋と為す。

〔『妮古録』〕

隨筆劄記、頗る倫次無し。

〔『書蕉』〕

未だ扱の精ならざるを免れず。

〔『逸民史』〕

などと評されている。また、山人派についても、明の末年、国政壞れて、士風も亦た壞る。聰明を掉弄い、防檢

を決裂し、遂にかくのごときに至る。屠隆・陳繼儒の諸人、その咎に任らざるを得ず。（『張氏藏書』）

しかし、まさにここで鳩巢が批判した「逸居して」「図書を蓄て以て生を樂しむ」生活こそ、竹洞や三竹たちにとっては、魅力を感じてやまない、中華文人の生活スタイルであった。そして、その生活スタイルのイメージが形成されるにあたり、大きな影響力を持ったと考えられる書物が『遵生八牋』である。

### 五 『遵生八牋』と『四時幽賞』

高濂（生没年未詳）の『遵生八牋』（万曆十九年（一五九一）刊）は、それまでの中国の養生法を集大成した書物であり、四庫分類では「医書」とされる。しかし、『四庫全書』の「総目」には、つぎのようにある。

書中に載する所、専ら以て閒適消遣の用に供す。標目編類、亦た多く纖仄に涉り、明季小品の積習を出ず。遂に陳繼儒、李漁等の濫觴為り。

つまり、陳繼儒や李漁らの小品文の濫觴であると言われており、山人派の活動や「隨筆」の流行の端緒となった書物であると解説されている。

構成は、名前の示す通り八つの牋から成る。それぞれ「清修妙論牋」は養身の格言を集め、「四時調撰牋」は季節に応じた修養の秘訣を述べる。「起居安樂牋」は生活空間や道具など養生に資すべき物について解説し、「延年却病牋」は服氣導引の諸術についてまとめる。「飲饌服食牋」は食品名目を解説し、「燕間清賞牋」は賞鑑清弄の事を論ずる。「靈秘丹藥牋」は高濂自らが試したという方薬を解説し、

「塵外遐筭牋」は歴代の隱逸百人の伝記を収録する。

つまり、全体としては、養生の理念から歴史、また日常生活に使用すべき細かい道具に関することまで、あらゆることがまとめられている。養生と隱逸には共通する要素が多いため、山居隱逸の生活の手引き書としての側面の強い書物でもあった。<sup>19)</sup>

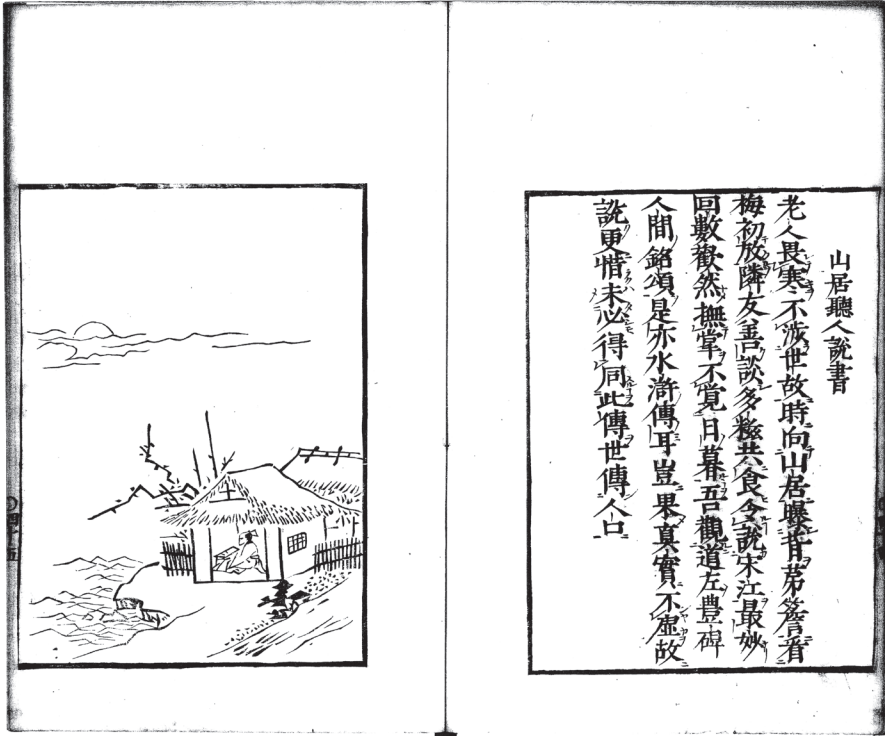
この『遵生八牋』は、万曆十九年（一五九一）に刊行後、まもなく日本にも舶載されたらしい。『惺窩先生文集』にも、「八牋」を購入し「四十三錢」を侍童に持たせたという書簡が載る。また、羅山の「既見之書目」<sup>21)</sup>には記載がないものの、『梅村載筆』に書名が見え、羅山が三十九歳の元和七年（一六二一）秋に撰述された『野槌』<sup>22)</sup>には引用が見られるなど、比較的早い時期から注目されていたようだ。

さて、当時における『遵生八牋』への興味のあり方を、より具体的に知ることができる資料として、野間三竹の『四時幽賞』<sup>23)</sup>（寛文八年刊）がある。「四時幽賞」は、高濂が自らの山居生活における四季の景物を随想風に記した文章で、もとは『遵生八牋』の「四時調撰牋」中に収録されている。春・夏・秋・冬の各巻に、それぞれ「高子春時幽賞」から「高子冬時幽賞」まで、各幽賞ごとに十二条ずつで、全て四十八条ある。

三竹の『四時幽賞』は、『遵生八牋』からその「四時幽賞」を抜き出し、狩野家の絵師たちに挿絵を依頼して刊行したものである。絵は、文章に因んだ水墨画風の山水や人物で、雅致ある書物となっている。三竹が『遵生八牋』の中からとくに「四時幽賞」に注目し、単独で刊行した理由については、その自跋（「高子四時幽賞跋」寛永二十年）につきのようにある。

大凡古今の間、逸士の林岳に隱る、世に乏しからず。人の史筆を乗る者、懿行を記し、簡冊を照す。伊尹の有莘に耕し、尚父の涓濱に漁す。靖節の高節、和靖の雅操の若きに至りては、豈

『四時幽賞』より「山居聽人說書」(個人蔵)



に深意無からん乎。仲尼の夷斉を称して曰く、其の志を降さず、其の身を辱しめず。魯連は何人ぞ哉。嘗て海上に隠れて曰く、富貴を与つて人に誼んより、寧ろ貧賤にして世を軽くし志を肆にせん。是れ魯連の魯連為る所以耶。百世の下、高深甫氏、其の幽を得て其の微を探り、其大を見て其の小を忘る。烟霞と友と為り、魚鳥と伍と為る。著す所の遵生の賤、観る可し。賤の中、尤も観る可き者は、四時幽賞、是れ也。顧長康氏が四時詞、人口に鱸炙す。文場に遊ぶ者、四序の変遷を取りて、以て墨客の口実と為す。春にして花、秋にして月、雲の夏に於ける、雪の冬に於ける、皆風流を起さざる無し。豈に他に求めん哉。独り深甫氏有る耳。一小堂に坐して一小冊に対すれば、則ち花雲前に在り、雪月後に在り。此の身と此の心、林泉に入るが如く、峯巒に遊ぶに似る。卷舒の間、茫然として世と相ひ忘る。後に此の編を読む者、以為く如何と。是れが為に跋す。

寛永癸未八月五日 胸丘居士埜子苞書于紙窓竹屋下

以上の跋で述べられていることは、隠逸としての高濂への賞賛と、その生活への賛美である。すなわち、伊尹や呂尚、伯夷や叔斉について言及した後「百世の下、高深甫氏、其の幽を得て其の微を探り、其大を見て其の小を忘る」と高濂その人に言及する。つまり、高濂を隠逸の系譜を継ぐ人物として考えていたことが判る。

跋はつづいて「春にして花、秋にして月、雲の夏に於ける、雪の冬に於ける、皆風流を起さざる無し。豈に他に求めん哉。独り深甫氏有る耳」と記して、「四時幽賞」に記された高濂の逸士としての生活ぶりを理想とすることを述べている。

興味深いことに、同じく『四時幽賞』に載る鷺峰と竹洞の跋には、京都での三竹の生活ぶりを高濂の生活ぶりに準える記述がある。先

味の生活を送っていた。

西のかた北山に帰るときは、則ち閑淡に素して閑淡を行ふ。想ふに彼の北山の幽、四時の賞、自ら其の境に在り。爰に此の図を開いて、高氏を異域に喚起するとき、高氏と志を同くし、睡て高氏と夢を同くするときは、則ち未だ高氏子苞為るか、子苞高氏為るか知らざるか

(鶯峰跋)

叟退て白雲溪に在るときは、則雲と半閑、山と咫尺、泉に濯ひ、石に漱ぎ、以て四時の幽賞を寓すと也

(竹洞跋)

こうした三竹の生活への賛美は、先に引用した『群書考』の序文で述べられていたことと共通する要素を持っている。ということは、三竹たちが理想とする生活は、ちょうどこの「四時幽賞」で描写されるような中華の文人風の生活であったと理解できる。つまり、明末清初の「随筆」によつて、隠逸・山居・読書・随筆といったもののイメージは、このように明確な形を与えられていたということが理解できるだろう。

## 六 『本朝遼史』

さて、以上では、三竹や竹洞が理想とした山居隠逸のイメージは、明末清初の「随筆」の影響で、その具体的な印象が形作られていたことを確認してきた。とすれば、つぎに取り上げる事例も、その延長で理解することができるだろう。

林読耕斎の『本朝遼史』（万治四年（一六六一）序、寛文四年（一六六四）刊）は、日本の隠逸五十一人を選び、その伝と賛を収録したものである。中に「吉田兼好」の伝があり、そこで『徒然草』を「随筆」という言葉を使って説明している箇所がある。『枕草子』を随筆と称した文献の出現は近世中期まで下るとされていることを

考えれば、あるいはこれが『徒然草』を「随筆」と称した最初の文献ではないかとも考えられる。

吉田兼好

兼好は兼顕が子なり。後宇多院北面の臣なり。左兵衛佐に任ず。帝崩じて後、塵を出て嘉遼す。文才有り。倭歌を善くす。当時、頓阿、淨弁、慶運と其の名相比し、世に之を倭歌の四天王と稱す。往往に武藏守高師直が家に遊び、又他国を歴遊す。曾て木曾路を過ぎて詠歌有り。且、暇日倭語の草子を作り徒然草と号す。其の世俗を憤り、生死を觀じ、時序を感じ、風景を模し、人情を説き、私見を抒ぶ。固に是れ倭文の尤なるものなり。

賛に曰く、竺籍の扶桑に播布するや、故に毎事其の語を用るもの多し。四天王も亦是れなり。綱、公時、貞道、末武は、頼光が四天王なり。今井、樋口、楯、根井は、義仲が四天王なり。栗生、篠塚、畑、亘理は、義貞が四天王なり。兼好も亦、倭歌四天王の列に在り。今、宜しく四傑四才子を以て之を称すべくして可なり。何ぞ其れ、師直が示諭を辞せずして、艶簡に筆を染むるか。信に一生の過錯なり。慨惜す可し。吁、徒然の草、乃ち華人筆談隨筆の類なり。所謂る燈下に独坐して古書を読み古人を友とすと。彼、固に読書の樂を知る。四書五経、既に佔畢す。又、老莊を喜び、又、蕭選、白集を愛して、本朝の編簡多く涉獵す。徒然草を披けば了然たり。羅山子、往歳之が抄解を為る。号して曰く、野槌と。世に棗行して桑域に伝布す。

〔『本朝遼史』下巻「吉田兼好」

問題にしたい箇所は、賛の後半にある「吁、徒然の草、乃ち華人筆談隨筆の類なり」という部分である。この表現は、先に検討した、『群書考』の竹洞の序文の記述と類似点がある。すなわち、竹洞が「隨



筆」と言い切らずに、「筆談、筆記、隨筆、佔筆」と言葉を並べ、「此の類」、「…の如き是也」、「斯の若きの書」という漠然とした言葉遣いを重ねていることと、ここで読耕齋が「筆談隨筆の類」とやはり「隨筆」と言い切らないことの類似である。

これは、当時は現在のように「隨筆」という用語がまだ定着しておらず、おそらくは漠然とした用語、概念であったことをうかがわせる言葉遣いである。つまり、当時、中国の隨筆筆記の存在があつて、はじめて「隨筆」というジャンル・概念を意識するようになったと考えることができよう。

それにしても、読耕齋は、なぜ『徒然草』を中国の「隨筆」に準えたのだろうか。つまり、先ほど検討した三竹の著書は、漢籍を材料にして、しかも陳繼儒などの著作と同様の方法で編集したものであるから、中国の「隨筆」に準えられても何も不思議はない。しかし、あたりまえのことだが、読耕齋自身も「倭文の尤なるものなり」と評価しているとおり、『徒然草』は日本の古典である。にも関わらず、読耕齋が中国の「筆談隨筆」に準えているのは何故だろうか。

## 七 兼好を「隱逸」として見る意識

読耕齋の意識を探るため、まずは読耕齋がこの伝を書く際に拠つた資料と比較してみよう。読耕齋は、羅山の『野槌』の記述をなぞるようにして、この伝を書いている<sup>(27)</sup>。そこで、まず伝の冒頭の記述と、『野槌』のつぎの記述をくらべてみよう。

徹書記が物語に、或云兼好は後宇多院の北面の侍也。帝崩じて後、髻をきりて遁世す。此時、淨弁、慶雲、頓阿、兼好の四人を、世に四天王と号すと也。 (『野槌』)

両者はほぼ同じだが、兼好が出家したことを、『野槌』が「髻を

きりて遁世す」と記すのに対し、『本朝遯史』は「塵を出て嘉遯す」としていることがわかる。

『野槌』でいう「遁世」とは、仏教で言う「出家遁世」である。しかも「髻をきりて」とあるから法体となったことを明記している。それに対して、『本朝遯史』の「嘉遯」は『易』に由来する言葉である。すなわち、『易』の「遯」の卦の「象伝」に「嘉<sup>よ</sup>く遯<sup>のが</sup>る。貞にして吉なりとは、志を正しくするを以てなり」とあつて、世を逃れて自らを清く保つという意味である。

つまり、読耕齋は「遁世」という仏教用語を嫌って、「嘉遯」という『易』に由来する言葉に言い換えたのである。これは、中国の隱逸を志向した『本朝遯史』という書物の性格を考えれば当然の姿勢であるといえよう。このように、仏教や老荘の色彩を排除し、収録する人物を儒教風、中国風の隱逸に描き直そうとする姿勢は他の伝にも共通に見られる要素である。

つづく部分も『野槌』に拠つて書かれたと見てよい<sup>(28)</sup>。そして、伝の最後の部分に『徒然草』に言及した箇所があるが、この部分も『野槌』のつぎの記述をもとに書かれたことが明白である。

世俗をいきどほり、生死無常を觀じ、時序を感じ、風景をうつし、男女の情をいひて、己が志をのべたり。まことに和語の文章をいいて、殊にすぐれたる者也。 (『野槌』)

さらに贊の部分でも、兼好を隱逸として描こうとする意識は続いている。まず、贊の冒頭では「四天王」という呼称について、仏教に由来する言葉であるから「四傑四才子」などの呼称の方がよいという意見を述べている。

また、つづいて師直の艶書に関わつた件について「信に一生の過錯なり。慨惜す可し」と論評する。「一生の過錯なり」という言い方はやや強い表現だが、これは不正な権力に陥つたことを言っている

るのだろう。隠逸というものは、世に正しい道徳が行われないうちにするものであるとは、『易』に見える基本的な定義である。先に引用した「象伝」にも、「貞にして吉なりとは、志を正しくするを以てなり」とあった。その観点でみれば、不道徳な師直の要求にしたがったということは、隠逸としては失格である。したがって、「一生の過錯」という厳しい措辞を用いたのであろう。

さて、賛の部分でとくに注目したいのは、「所謂る燈下に独坐して古書を読み古人を友とすと」とあることである。この箇所は『徒然草』第十三段に、

独燈のもとに文をひろげて、見ぬ世の人を友とするぞ、こよなうなぐさむわざなる。文は文選のあはれなる巻々、白氏文集、老子のことば、南華の篇。この国の博士どもの書けるものも、いにしへのは、あはれなる事多かり。

とあることによる。つづく部分で「老荘」と「蕭選」「白集」にふれたのも、この『徒然草』第十三段の記述を念頭においたためであろう。だとすれば、この箇所が『徒然草』の本文に見えない四書五經に言及したのは、やはり読耕斎の儒者としての意識によるものであろう。

さて、ここであらためて問題にしたいのは、数ある『徒然草』の章段の中から、読耕斎がとくに第十三段を念頭において兼好の読書について言及したのは何故か、ということである。

答えは以上の検討から明かであろう。読耕斎は、兼好を隠逸として描こうとしていた。その描き方は、中国の隠逸を志向することの強かった読耕斎の意識の反映であるし、『本朝遷史』という作品の性格に照らしても当然である。その際、兼好の読書に触れることは、兼好が隠逸であることを示す重要な要素であった。とすれば、以上に検討した山居隠逸と読書・随筆のイメージの結び付きによって、

『徒然草』を中国の随筆に準える見方が生じてくるのも、また当然であったと考えられよう。このようにしてはじめて、『徒然草』は、『随筆』であると認識されるようになったのである。

#### おわりに

松永貞徳は『なぐさみ草』の跋に「此つれづれ草も天正の比までは、名をしる人もまれなりしが、慶長の時分より世にもあつかふ事となれり」と記している。また、同じく『なぐさみ草』の跋には、「其比、儒学医学の若き人々、丸にも、這つれづれ草をよみてきかせよ、と所望せられしかども、ふかくなみて過し侍りに……（中略）……是非に及ばずしてよみ侍し。これつれづれ草の講尺のはじめにて待ると世に申きと云々」と記されており、貞徳の有名な『徒然草』講釈は、当時の歌人や連歌師の要請ではなく、儒学や医学を勉強していた若い人々の要望に応えたものであったという。

たしかに、近世に『徒然草』が広く読まれるようになるきっかけをつくった三人の人物、すなわち『徒然草』の初期の刊本である烏丸本を刊行した三宅亡羊、また初めての注釈書『寿命院抄』を著した秦宗巴、さらには後の『徒然草』注釈書に大きな影響を与えた『野槌』の著者である林羅山は、いずれも専門的な歌人や連歌師ではなく、漢文学の素養を身につけた人物だった。すなわち、三宅亡羊と林羅山は藤原惺窩門とされる儒者であり、秦宗巴は曲直瀬流の医家である。当時の医者は、漢方医であるから、最新の漢籍に触れやすい立場だった筈である。本稿で取り上げた野間三竹が医家であることも全くの偶然でない。

とすれば、『徒然草』は、和文でかかれた日本の古典でありながら、儒者や医者など、漢学者たちによって、最初に「随筆」としての面

白さが、発見された作品であるということが出来るだろう。亡羊、宗巴、羅山の『徒然草』に対する意識は別に検討が必要であるにしても、近世前期における『徒然草』享受の原点には、本稿で検討したような、中国明末清初の「随筆」流行の影響があったのではないかと考える所為である。

注

(1) 近世の「随筆」について、『日本古典文学大辞典(岩波書店)の「随筆」

〔近世〕『近世における随筆意識』の項目(中村幸彦氏執筆)はつぎのように解説している。

日本の古典文学の一ジャンルとして、『枕草子』を「随筆」の用語で呼んだのは伴蒿蹊の『国文世々の跡(くわんぶんせせのあと)』に始まる。それ以来、中世末までの作品では、大体『枕草子』『徒然草』風の文学的なるものを随筆と称している。近代に入っては、西欧文学のエッセイの概念も加わって、文学的要素を持ったもの以外には、これまた随筆の称を使用しない習慣がある。しかし、近世に限っては、『にぎはひ草』(佐野紹益)とか『花月双子』(松平定信)とかの、みやびな書名を持った伝統的な文学的随筆の風が続いている一方で、学問的・知識的、考証風・見聞録風など、前者の一群とは性格の相違した様々の著述も、当時から今日まで、随筆と認められているものが種々出現している。早くは一条兼良の『東斎随筆』、黒川道祐の『遠碧軒随筆』(↓遠碧軒随筆分類抄)、林羅山の『羅山林先生集』の文集卷六十五―七十五の随筆の部分など、漢学の素養のある人々が「随筆」の語を自著に使用し始め、やがて『四庫全書』そのもの、『四庫全書総目録』『四庫全書簡明目錄』などが渡来する頃となると、「随筆」の文字を持つ書と共に、『四庫全書』子部の「雑家類」に分類されている書物が用いている語を付した、随筆類の著述がおびただしく現われた。多田南嶺の『南嶺子』、永田善斎の『贈余雜録』、

太宰春台の『紫芝園漫筆』、清田儷叟の『孔雀樓筆記』、喜多村筠庭の『筠庭雜考』の如くである(傍点を付した部分が漢籍と共通の語)。その風は漢学者に始まって、国学者から戯作者まで、操觚者全般に及ぶ。思うに、日本近世の漢学者たちが、中国近世の宋から清初に及ぶ儒者文人が「雑家類」に分類される随筆風著述を多く残した風に学んで著述したことが、筆を執る人々に広く影響して、前述した近世の様々な「随筆」の氾濫となったものである。

(2) 『徒然草』とならんで古典随筆の代表作とされる『枕草子』をはじめ

めて「随筆」と呼んだ文献は、伴蒿蹊の『国文世々の跡』(安永三年跋、同六年刊)であるという指摘がある。注(1)を参照。

(3) なお、文献によっては慶長十三年生まれとする。

(4) 東北大学狩野文庫蔵本による。

(5) 「随筆」という言葉は、しばしば指摘されるように『容斎随筆』の序に「予、老い去りて懶に習れ書を読むこと多からざれども、意の之くところは、随つて即ち紀錄す。因つて其後先は覆た詮次することなし。故に之を目して随筆と曰う」とあることに由来する。

(6) 明末清初の「小品文」は、一九三〇年代の中国の所謂「小品文ブーム」の際には盛んに顕彰がおこなわれた。この明末清初の小品文の流行については、合山究氏「小品文学と張潮」(『文学論輯』第二十四号九州大学教養部文学研究会 昭和五十二年三月)、「明清時代のアフォリズム文学」(『文学論輯』第二十五号九州大学教養部文学研究会 昭和五十三年六月)を参照。

(7) 山人については、鈴木正氏「明代山人考」(『清水博士追悼記念 明代史論叢』大安 昭和三七年六月)や大木康氏「山人陳繼儒とその出版活動」(『山根幸夫教授退休記念明代史論叢(下)』汲古書院平成二年三月)・「明末のはぐれ知識人 馮夢龍と蘇州文化」(『講談社選書メチエ45 講談社 平成七年四月)などで論じられている。

(8) この流行は日本にもつたわり、「山人」号を名乗った漢学者たちは多い。たとえば、北肉山人(藤原惺窩)、羅浮山人(林羅山)、六々

- 山人(石川丈山)、北山人(野間三竹)、などがそうである。
- (9) 『和刻本漢籍隨筆集 第三集』(汲古書院 昭和四十七年十月)の長澤規矩也氏「解題」による。
- (10) 『万曆癸卯八月既望』吳獻台序。『和刻本漢籍隨筆集 第一二集』(汲古書院 昭和四十九年七月)を参照。
- (11) 『万曆甲申一陽下流之吉』黃貞外序。『和刻本漢籍隨筆集 第八集』(汲古書院 昭和四十八年十一月)を参照。
- (12) たとえば、日本に舶載されて和刻本の底本になったものに、『野客叢書』(『陳眉公重訂』承応二年 中野是誰版)、『世範』(『華亭陳繼儒訂』寛文九年 村上版)、『国朝七子詩集註解』(『新刻陳眉公攷正』元禄二年 宇都宮遯庵跋刊)などがある。
- (13) 合山究氏は、「たとえば、小品文学の第一人者である陳繼儒は、今の典籍を渉獵し、防寒や避暑の記事を集めては、「辟寒部」四巻・「銷夏言」四巻を著し、虎に関する記事を集めては「虎蒼」六巻を著すなど、古今の書物から資料を収集して編んだ書物を、少なくとも二十種ばかり出版している。このような例は枚挙にいとまがない。今日からみれば、ばかばかしいことに精力を浪費しているように見えるが、当時においては、自分の好みや時好になつた魅力あるテーマを選んで、編著をあむことは、有意義な仕事だったのである。たしかに、物によっては、なまやかな創作よりも、遙かにおもしろく、価値のあるものもある。」(『明清時代のアフォリズム文学』『文学論輯』第二十五号 九州大学教養部 昭和五十三年六月)と指摘されている。
- (14) 『訂正秘笈』(万曆三十四年(一六〇六)刊)・『続集』(刊年不詳)・『彙集』(『広集』(万曆四十三年(一六一五)刊)・『普集』(泰昌元年(一六二〇)刊)・『眉公雜著』(万曆三十四年(一六〇六)刊)で構成される。
- (15) 拙稿「近世前期における陳繼儒の影響―三竹・丈山・鶯峰・読耕斎を中心に―」(『近世文学研究の新展開―俳諧と小説―』ペリかん社 平成十六年二月) 参照。
- (16) 三竹の著作には、その所々に典拠とした漢籍の書名が書き添えられている箇所があるため、それを参考に集計した。
- (17) なお、これらの中には「説郛」や「説郛続」、「百川学海」、「広百川学海」といった他の叢書に重複して収録されているものもあり、すべてを『宝顔堂秘笈』で見つめたと断定することはできない。
- (18) 中村幸彦氏「近世隨筆について」(『中村幸彦著述集』第十三卷(中央公論社 昭和五十九年七月) 参照)。
- (19) 拙稿「近世前期における『遵生八牋』受容―丈山・読耕斎・三竹を中心として―」(『近世文芸 研究と評論』54号、平成十年六月) 参照。
- (20) 与玄東
- 作者嘉恵。病体甚適。多可多可。八牋價銀。即今四十三錢。附此重齋持以去矣。渡与売書漢。則足下先容之勞亦不尠。謝之有余。琅琊之一編。留在架上。不日還納焉。至意過蔡即者曼曼。幸之又幸。赫号無余地於展布也。
- (21) 「羅山先生年譜」の慶長九年(一六〇四)の条に記載。
- (22) 元和七年は「遵生八牋」が刊行された万曆十九年から三十年後のことである。
- (23) 「羅山先生年譜」による。
- (24) 大本二冊。刊記「寛文八年戊辰夷則下旬/洛陽小川 林和泉掾。自跋(寛文癸未八月五日)・鶯峰跋(寛文丁未季秋)・竹洞跋・自跋(寛文七年至日前日)。
- (25) 三竹の『四時幽賞』は寛文八年に刊行されたものだが、つぎに示す自跋(『再書四時幽賞後』)によれば、もともと寛永年間(もう一つの自跋の年記によれば、寛永二十年か)には、ひとまずは成立していたことがわかる。
- 余が高子の四時の幽賞を嗜むこと久し。寛永年中新に工をして之を画か使む。是に於て、無声の詩、已に成りて、之を林羅浮子に謀る。羅浮子、喜びて之を領す。荏苒たる歲月、之を良工に謀らんと欲し、工、宦事鹽いこと無し。諾して未だ成らず。今茲何れの年ぞや。今の執事板倉君重矩、余と総角の雅有り。故に眷眷久し。乃ち、衆工を鳩て之を写さ使む。余に賜ふ工は、

乃ち探幽齋守信、牧心齋安信、及び采女益信、右近常信、右京時信、五子。皆通家にして世の称する所の狩野家といふ者、是也。守信は工の長なり。安信は其の叔にして三子皆家風に愧ず。其の裝潢は、関宿の明府重常之を成す。其の書は竹洞子狛庸及び余が門人北嶋三立之を題す。林学士之が後叙を作る。書画文筆の美、共に相成る。遂に之を至宝とす。將に万祀に伝んとす。故に余不佞再び其の後に書すと云ふ。

寛文七年至日前日 柳谷散人整子苞父書諸北山山房

なお、跋文中に「之を林羅浮子に謀る。羅浮子、喜びて之を領す」とあるが、羅山は『野槌』に『遵生八牋』を引用しており、とくに第十九段「折ふしのうつりかはるこそ」では、「○灌仏のころ」の語釈の最後に「この段四季のうつりゆく次第。風物景色の形容。筆にまかする所。おもしろく覚え侍る」と記して、「顧凱之か四澤の水。奇峯の雲。明暉の月。孤松の嶺。東坡先生か四時の詞に至るまで。節序の感ぜずといふことなし。近比雅尚齋か四時の幽賞こそ。今一きはあはれなるこそおかしけれ」と「四時幽賞」に言及する。

(26) 注(1)・(2)を参照。

(27) 『本朝遼史』上巻には「援引書目」として、『本朝遼史』執筆の際に参照した文献の一覧が記載されている。そこには「懷風藻」以下、「三愛倭字記」に至るまで、全部で七十八種類の書名が列挙されている。その中で、兼好に関係する記述があるものは「作者部類」・「堯孝歌話」・「太平記」・「吉田氏系図」・「徒然草」・「野槌」・「続作者部類」の七種類である。もちろん、読耕齋はこれらの資料全てに目を通していた筈だ。しかし、結論からいえば、羅山の『野槌』の記述をなぞるように書かれていることが確認できる。

(28) 両者を比べると、兼好が兼頭の子であることと、左兵衛佐であったことが『野槌』にはない。しかし、『野槌』は別に「卜部系図」を引用しており、それを参照すれば、この二点の情報が記されていることが確認できる。

(29) 「往々に武蔵守高師直が家に遊び」の部分は、「太平記」巻第二十一「塩

治判官讒死事」の内容を踏まえているが、このことも『野槌』に「高ノ武蔵守師直にまみえて、師直に代りて、塩治判官が妻のもとへ、艶書を書いてやりけるとや」という記述がある。

また、「又他国を歴遊す。曾て木曾路を過ぎて詠歌有り」という部分だが、その詠歌は『風雅集』巻十七に収録される次の和歌である。

世をのがれて木曾路といふ所を過侍るとて 兼好法師

思ひたつ木曾のあさぎぬ浅くのみ染てやむべき袖の色かは

ところが、『本朝遼史』の「援引書目」には『風雅集』の書名は挙げられていない。しかし、この情報も『野槌』に引用されているので、やはり読耕齋は『野槌』に拠ったと考えて良い。

(30) 『なぐさみ草』の引用は吉澤貞人『徒然草古注釈集成』（勉誠社 平成八年二月）による。なお、引用にあたっては、私に濁点を補った。本稿でも言及したとおり、『本朝遼史』は『野槌』の「徒然草」に対する評を引き継いでいた。さらに指摘しておけば、その『野槌』

(31) の評は、『寿命院抄』の「無常ヲ観ジ名聞ヲ離レ、専ラ無為ヲ樂ン事ヲ進メ、傍ヲ節序ノ風景ヲ翫ビ、物ノ情ヲ知ラシムル者乎」という評と、やはり地続きのものである。とすれば、慶長・元和期にはじまる『徒然草』の享受のあり方は、万治・寛文期の読耕齋の世代まで引き継がれていると言つて良いのではなからうか。

(32) たとえば、『節序紀原』という類書がある。小本一冊で、貞享甲子（元年）弥生上旬の欽止子の序を持つ。『民間歳時記』に做つたと称するものであるが、「援引書目」があり、『前漢書』以下、多くの漢籍が名前を連ねている。『荆楚歳時記』『容斎随筆』『遵生八牋』『事物紀原』『西陽雜俎』など漢籍の随筆作品の名前が並んでいる最後の方に、「兼好徒然草」が載る。和文の随筆でありながら、中国の随筆と同様に扱われている例として興味深い。

(付記) 本稿は平成二十二年度科学研究費補助金（基盤研究(C)「林鷲峰交遊圏の研究」課題番号22520217）の成果である。

